

古代の足跡

[Archaeological specimens #01]

かみいふくくのつぼ

上伊福九坪遺跡

■弥生土器の美から見えるもの #01

1983年、現在のカリタスホール建設に伴って行われた発掘調査によって、弥生時代中期から古墳時代前半期を中心とした遺物、遺構が確認された。特に一括して出土した弥生時代の土器群は我々の心に強く語りかける。その優美でスマートなフォルムは非日常的な機能を想起させる。

通常、弥生土器には口縁は使用されておらず、基本的には粘土紐を積みあげる縄文土器と同じ製作技法が採用されたとされる。また縄文土器に比して弥生土器が高温で硬く焼かれたとは必ずしも言えず、焼成温度も600~800度程度であったとの考えもある。弥生土器の表面調整には鉄で加工した木製道具が使用されている。例えば、鉄刃で割った木板で平行の細い筋目を残す「刷毛目」、また鉄刃で木に刻みを入れた「櫛」で描く方法、鉄刃で平行線を刻んだ叩き板で「叩き目」を入れる方法である。

弥生土器に見る美的要素と製作技術の背景には、大きな社会変動と技術革新があったと考えざるをえない。弥生土器には時間をかけて丁寧に製作されたものと、時間をかけず雑につくられたものがある。この背景には土器の使用目的が有力者用と一般民衆用に分化し社会階層化が進んだ事が考えられる。一方、雑につくられた土器の存在は消耗品として大量生産されるだけの社会の発展があつたと事を想起させる。



壺形土器



壺形土器



壺形土器



上伊福九坪遺跡出土土器

遺
す

上伊福九坪遺跡

[Archaeological specimens #02]

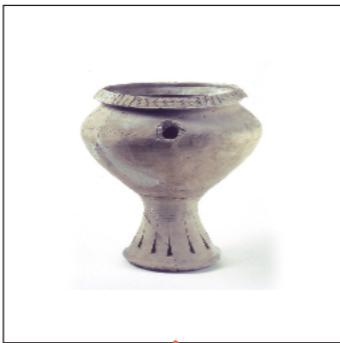
■弥生土器の美から見えるもの #02

弥生時代の各時期においても土器の様相は大きく違う。例えば、ある地域において技術的に洗練された土器が文化的先進地域である畿内では見当たらない場合がある。これは畿内では時間と労力をかけた土器づくりの段階を既に終えていたとも考えられる。

近年、弥生土器の機能を考える上で重要な新発見が相次いでいる。特に注目されるのは、山陰の青谷上寺地遺跡出土の木器群である。その中には上伊福九坪遺跡出土の底部に縦長のスリットが入った壺と酷似した一木彫りの器もある。またスリット用と思われる独特な形をした耳かき状工具も出土している。さらに木地に複数のコンバスのような円が見られる事から、高速回転のロクロを使用したとしか考えられない木製高杯もある。

これは当時、恐ろしく高い木工技術を持った職人集団が山陰にいた事を物語る。多くの遺跡では木器は土壤の関係上、腐ってしまっていて出土するのは稀である。もしかしたら祭器には特殊技能を必要とした木器が珍重され、土器はその代用品だったのかもしれない。我々は上伊福九坪遺跡の美しい土器を見ながらその奥に隠された多くの事柄を類推しなければならないのだ。

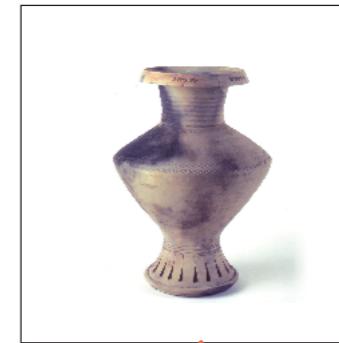
注口土器



脚付壺形土器



脚付壺形土器



器台



鉢形土器



高 坯

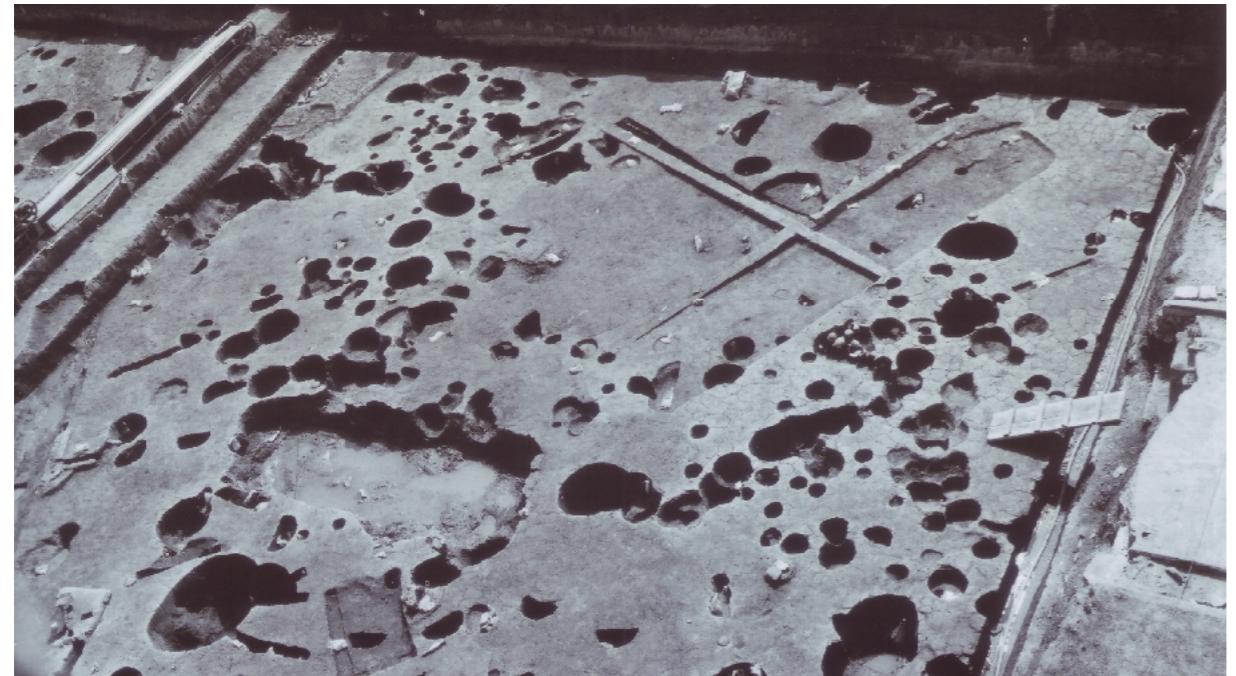


上伊福九坪遺跡出土土器



遺跡発掘風景

[Archaeological specimens #03]



Archaeological specimens #03

